

岡崎牧場と尼崎の酪農

文明開化とともに牛肉や牛乳が食用とされ、明治時代の中後期には需要も増えてきたようです。ここ尼崎においても、明治期に乳牛飼育が始まります。大庄村浜田では、寺岡庄五郎が牧場を設立しました。その牧場を明治39年に田口捨吉が受け継いで乳牛15頭、東大島では明治40年に長尾駒太郎が、乳牛19頭の飼育を開始しています。また、尼崎町においては吉弘牧場、スミレ牧場・西村牧場が開場しました。牛乳販売業者も数件確認されています。さらに園田村御園では、森永製菓塚口工場の委託を受けて、乳牛飼育が始まりました。これが、昭和28年に国鉄塚口駅北側に開設された岡崎牧場です。当時は冷蔵技術や輸送手段があまり発達していないこともあって、都市近郊での生産と消費が多くを占めました。牧場は糞尿などの汚水を多量に流すこともあり、庄下川沿いにも多く存在していました。

昭和28年、尼崎市は乳牛の無償貸付制度を開始し、酪農経営の振興を奨励しました。昭和30年には尼崎市酪農農業協同組合が設立され、同35年には飼育頭数1800頭余、飼育農家は120戸を記録しました。尼崎に牧場が散在し、酪農がさかんに行われていたことなど、今では殆ど想像がつかないことです。岡崎牧場では、牛乳を森永製菓だけでなく、学校給食や一般家庭にも供給していました。当時はスーパーマーケットもなく、一般販売は牛乳販売店による配達が主体でした。

当時各家庭の玄関先には、牛乳箱が設置されていました。岡崎の牛乳箱は緑色に斜体で「岡崎牧場」と書かれたデザインでした。これは、大阪の十三にあった別の岡崎牧場のものと酷似しています。おそらく両社には、親戚関係か何かのつながりがあったのでしょう。

学校給食については昭和39年、共同調達のために市内の牛乳業者が尼崎牛乳事業協同組合（あまにゅう）を結成しました。当時は、塚口の早野牧場、昭和牛乳、阪神尼崎の岡本牧場、大庄の長尾牧場、御園の中橋牧場等が学校牛乳を扱っていました。各社は牧場と名がつくものの、やがて調整や瓶詰、集配などを主業とするようになったようです。給食用には市内の生産だけでは大幅に足りず、原乳の多くは熊本からタンクローリーで運んでいました。

昭和40年代にかけては、日本は高度経済成長期を迎えます。それに伴い尼崎もみるみる市街地化されていきました。牛舎の臭気が周辺住民に影響を及ぼす環境問題が、あちこちの牧場で取りざたされました。また、高速道路など交通網の充実、冷蔵輸送や保管などの発達によって他県遠隔地からの納入も可能となりました。その結果、広大な土地での大規模牧場による牛乳に比して、尼崎産牛乳はコスト面や品質で不利な状況に追いやられました。さらに、輸入自由化による乳製品の流入もありました。このように様々な環境要件や経営条件が悪化していく中、昭和40～50年代には尼崎の牧場は次々に廃業していきました。池田牧場・山仙牧場など共に岡崎牧場も閉鎖となりました。そして昭和57年には、御園酪農協同組合も解散します。平成6～8年にかけては、児童の減少や阪神淡路大震災の影響で設備管理もままならず、早野牧場や長尾牧場も廃業しました。そして平成20年、唯一残っていた西昆陽の酪農家が廃業したことにより、尼崎市における酪農は幕を下ろすことになるのです。



学校給食 岡崎牛乳



岡崎牧場の牛舎



岡崎牧場全景

参考資料：榎本利明著『尼崎市の畜産について』 各写真 上坂部小学校社会科資料

尼崎市立地域研究史料館『尼崎の農業を語る』『レファレンス協同データベース066』『尼崎市史』第9巻